
今から殺しに行きます

まなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今から殺しに行きます

【Nコード】

N0953Z

【作者名】

まなこ

【あらすじ】

【貴方のお悩み解決します。激安。激早。ご相談はもちろん無料。貴方の強い味方です。ご依頼は何でも屋アイレッシオまで】
なんて宣伝文句を掲げるお店。滅多に客の来ないこの店に珍しく客が来た。

依頼主は魔王様！？依頼内容は勇者を殺すこと！？
脅されて断ることも出来ず、バイト少女のニーナは勇者を殺すための計画を立てる。だけど、やっぱりそう簡単にはいなくて……

？1（前書き）

初作品です。

? 1

ニーナは机に肘を突きながら、ぼんやりと机の上の電話を見つめていた。

ここは何でも屋アイレッシオ。

貴方のお悩み解決します。激安。激早。ご相談はもちろん無料。貴方の強い味方です。

なんていう宣伝文句を掲げるこの店がわたしの職場だ。ちなみにわたしはただのバイトであって、この店の社長は別にいる。

わたしだったらこんな誰もこなさそうな店絶対やらない。

「暇……」

いつものように電話番号をしているが、この電話になることは滅多にない。
たまに鳴ることがあっても、ちゃんとした依頼が来たことはほとんどない。

80%は間違い電話か悪戯電話。残り20%はペット探しや無し物探しである。

せめて浮気調査とか、子供が行方不明とかそういう依頼がほしい。

あまりにも暇すぎる。

「これじゃあ、今月も赤字だよ……」

なんていいながら、今日の夕飯について考えた。
食材庫に何が入ってたかなあ……とそこまで考えたとき店のドア
が勢いよく開いた。

「っ！！！」

ドアについているベルが大きな音を立てる。
わたしはびっくりして思わず机の下に隠れてしまった。

ちなみにこのドアが開くことも滅多にない。

もっとはっきり言えば、わたしがこの店に出入りするときと、こ
の店の社長が出入りするときくらいしか開かないのだ。

そしてわたしも社長もこんな風にドアを開けたりしない。

二人とも静かに開けるタイプだ。

だからびっくりしても仕方がない。

と、自分に言い訳をする。

それにしても一体誰が……強盗？この店にお金なんてないのに……

なんて考えると、ドアの方から予想外の声がした。

「誰もいないじゃありませんか」

この声は……女の人？

聞こえたのは、予想外にも女の人の声だった。

「えと、今日はお休みなのかも……」

「そんなはずありませんわ。見て下さいまし。ドアの表にはちゃんと営業中と書いてあります」

「ほ、本当だ……じゃあ留守にしているのかな？」

「営業中に留守にするなんて、酷い店でございますわ」

どうやらもう一人いるらしく、幼い子供の声がした。声の感じからして男の子だろう。

なんて考えている場合じゃない、滅多にこないから分からなかったがこれはお客様ではないのか？

いつまでもこんなところにいるわけには行かない、わたしはちょっと恥ずかしかったが机の下から顔を出した。

「あの、その、いっいらっしやいませ！！！」

なんと言っているかわからず、思わず叫ぶと二人のお客様である人たちはびっくりした様子でこちらを見た。

「ひ、人いたね」

「……そうでございますわね」

いや、案外冷静だった。

「その、申し訳ありません。丁度ペンが床に落ちてまして、それを拾ったところにお客様が……」

苦し紛れの言い訳をすると、二人はそうですかと納得したようだった。

それでよいのだろうか。

「それで、何かご依頼でしょうか？」

わたしはにっこりと営業スマイルでそう言う。

この言葉を言ったのは人生で何度目だろう。なんか、仕事をして
いるって感じがする。

「そうでしたわ。まあ、長くなりますゆえ、一度座りましょう」

「あっ、そうですね」

なぜわたしが椅子をを進められているのかだろうか……

なんて思いながら対面式のソファの片方に座り、その後でお茶を
出し忘れていたことを思い出す。

「あっ、今お茶を！！」

「お茶は結構です」

女の方はきっぱりといった。

いらないと言われても出さないわけにもいけない。

「ご遠慮なさらずに……すぐにお持ちしますので」

「お気遣いありがとうございます。ではお言葉に甘えて頂きます
わ」

そういわれてわたしは店の中にあるキッチンに走った。
ついでに社長は一体何をしているのだろうと考え、怒りが沸いてくる。

きっとこの店の上にある自宅で未だに寝ているのだろう。

起こしに行こうか迷ったが、お客様を待たせるわけにもいかない。

わたしは起こしに行くのは後にしようと決めて、お茶を注いだ。

そして、お茶を持って席に戻ると奇妙な光景が目映った。

「あ……あの」

「何でございましょうか？」

女の人不思議そうに首を傾げる。

ああ、よく見るとこの人すごい美人だ。スタイルも抜群だし、長い赤い髪が美しい。それに胸も大きいし……。

わたしは自分の胸を見てため息をつきたくなった。

じゃなくて！

「お座りにならないのですか？」

ソファには小さな男の子だけがちょこんと座っていて、女の人はその傍らに立ったままである。

座ろうと言ったのはそっちなのに何故……と思っていたと女の方はああと説明してくれた。

「魔王様と席を同じにするわけにはまいりませんので」

「そ、そうなんですか……………て、え？」

今、サラリと変なことを言ったような……

「あの、今なんておっしゃいました？」

恐る恐る聞いてみると、女の人是不思議そうな顔をしながらもう一度同じことを繰り返した。

「魔王様と席を同じにするわけにはまいりませんので」

「……ま、おう様？」

わたしが気になった部分を繰り返して言えば、女の方はまたしてもああという感じで言葉を口にした。

「自己紹介が遅れましたね。わたくしの名ははマリアナ。魔王様のお世話係をしております、そして……」

マリアナと名乗った女性はソファに座る男の子視線を向ける。

「こちらが、現魔王様であられるヴァレリオ様にございます」

魔王様？あの男の子が？

わたしは、ぎこちなく男の子に視線を向けた。

視線が合えば男の子はペコリと頭を下げてくれる。

嘘でしょ……

？1（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0953z/>

今から殺しに行きます

2011年12月3日17時59分発行